



雑誌「フランス」

数十年前、フランス文学はとても華やかだった。純然たる文学だけでなく、周辺にモードや海外旅行への憧れといったオーラも伴っていたのだろうが、フランス文学という言葉の響きのなかにさえ、何か香り高いものがあつたような気がする。

それが今ではあまり目立った存在感がない。フランス文学はどこへ行ってしまったのだろうか。

「フランス」(白水社)という雑誌は分類からすれば語学雑誌に入るのだろうが、フランス語学習に関連したページは数えるほどしかない。大部分を占めているのはフランス文化についての軽妙で奥の深いエッセイだ。

エッセイといっても、いわゆるおフランス好きの薄っぺらな記事

ではなくて、長年の経験と研鑽にうらづけられた読み物である。研究を食材にして仕立て上げた気の利いた小鉢といったところだ。

十二月号でおもしろかったのは、上村くに子さんの『スタンダード「恋愛論」を読む』。若手パリパリのスタンダード研究者と著者自身の対話というかたちで、ヨーロッパ諸国の恋愛の様相が解き明かされている。副タイトルも「国ごとに恋愛の方法ってちがうの?」あの読みにくい『恋愛論』がこうも楽しくなるとは、まさに目からウロコだ。

ほかには『ルネサンス日録散歩』(宮下志朗)、『新しい世紀のなかのサルトル』(澤田直)、そしてまるで創意にとんだ小説のような



雑誌「ふらんす」

『敬虔な思い出たち マルグリット・ユルスナール』（岩崎力）など、いずれも小ぶりの連載。

フランス文学は健在だ。おしゃれで実用的で、ますます輝いている。

追記。この雑誌、二〇二一年の今も健在。たぶん内容もあまり変わっていない。

初出：毎日新聞「マガジンラック」二〇〇〇年一二月

ホームページ掲載：二〇二一年一月